

TAKESHI, BACK TO KTM

小池田猛、KTMでJNCCにカムバック。久しぶりの日本でのレースに楽しみが隠せない。

2016年シーズン、アメリカでのGNCCシリーズ挑戦を終えて帰国した小池田猛が再び日本のクロスカントリーを走る。他メーカーからのオファーを断って小池田が選んだのはKTM。アメリカで世界最高峰のレースを経験したライダーの走りに期待が集まる。

牧場やスキーゲレンデなどの広大なエリアを占有して刻々と変化する路面状況に対応しながらスピードを競う、モトクロスともエンデューロとも異なるオフロード・モータースポーツの花形のひとつがクロスカントリーレースだ。日本でも年々その人気は高まるばかりで、その頂点となるJNCC(全日本クロスカントリー選手権)では、会場によっては600台を大きく超えるエントリーを集める規模に育っている。そのJNCCで2008-2010年の3年間連続チャンピオンを獲得した小池田猛選手が、2012-15の4シーズン、世界中から腕に覚えのあるライダーが集まるアメリカのGNCC(Grand National Cross Country)への挑戦を終え、帰国した。小池田は2016年シーズン、JNCCにカムバック。渡米前と同じKTMをチョイスし、世界の走りを日本のライダーに披露する。

2005年にはモトクロス全日本チャンピオンを獲得した経験豊かな小池田は、アメリカから戻った2015年末、KTMの門戸をたたいた。小池田にとって、KTMがなければアメリカ参戦のきっかけを得ることもなく、また厳しいアメリカでの経験が彼自身、KTM以外でのレースをもはや考えられないほどに強く印象付けたためだ。他メーカーからの誘いもある中で、小池田はKTM 350EXC-F SIXDAYSを「最強のエンデューロマシン」としてチョイス。もはや「勝って当たり前」という小池田が目指すのは、むしろそのレースへの取り組みの姿勢と、今後に向けた後進の育成、そしてアメリカへのチャレンジの窓口づくりだ。

小池田が指摘するように、現在地上最強と断言していいエンデューロ&クロスカントリーマシンを送り出しているKTM。また、小池田を含むすべてのKTMユーザーに門戸を開いたレースサービスの充実のほかの追随を許さない。世界を知るからこそ、選ぶブランドが、KTMなのだ。



【小池田 猛選手】

JNCC AA#100 (KTM 350EXC-F SIXDAYS)
2005年全日本モトクロス選手権 IA1 チャンピオン。
2008-10年、全日本クロスカントリーチャンピオン。
2011年、同2位。2012年から戦いの舞台をアメリカに移し、前半をKTMで、その後マシンをスイッチし2015シーズン終了までGNCCを戦った。

2015年GNCC XC-1 ランキング 10位。

2016年からはJNCCを中心に日本でのレースを楽しむ。とはいえ、これまでの経験からも「マシンや体制はどうあれ勝って当然の立場であることは自覚しているし、その自身もある」と言い切り、レースへの参加は「ライダーとして走り、その走りを見せることで日本のライダーのレベルアップを図っていきたい」と後進の育成に意欲を見せる。アメリカでの経験は現地でのサポーターも数多く生み、「それを今後アメリカに挑戦するライダーたちに使ってもらえるような仕組みも考えたい」としている。

小池田猛は、平日はJNCCの社員として働き、JNCCやWEXなど日本のクロスカントリーレースをさらに盛り上げることに尽くしていく予定。特に、コースレイアウトづくりなど、これまで日本にはなかった本物のクロスカントリーレースを通してみてきた経験から大胆な刷新も試みていく。



KTM Japan ショールームの前でポーズをとる小池田。KTM 350EXC-Fは「GNCCでもほとんどのライダーが選ぶ最高のマシン。レースを組み立てるうえで一番大切な総合性能が高く、これ以外のマシンはもはや考えられない」と絶賛。さらに「KTMのレースサポートは抜群で、レースへの参加のむつかしさを引き下げてくれるベストな選択。プライベートだからこそ、KTMを選ぶ価値があると思う」と高く評価。

メディア関係者各位

この件に関するお問い合わせ： KTM JAPAN 株式会社 担当：野口

* オフィシャルフォトの提供も可能です。併せてご連絡いただけるようお待ちしております。

〒135-0063 東京都江東区有明 3-5-7 TOC 有明 2F

TEL: 03-3527-8885 FAX: 03-3527-8890 HP: <http://www.ktm-japan.co.jp/>